

新川200年の踏み車体験、新川川下り、 屋外歴史展示館の開催

主催：越後新川まちおこしの会



田に水を汲み上げる踏み車に挑戦、昔の人はこれを何時間もやっていたの、すごい



昔の苦労や踏み車の素晴らしさを体感

踏み車(足踏み水車、仙台ではジャバラ)は、羽根車を人が足踏みして回転させ、水田に灌漑用水を汲み揚げるための農具で、江戸時代の寛文年中(1661~73)に、大阪に住む京屋七兵衛・清兵衛という人が踏み車を製作し、宝暦・安永(1751~81)の頃には全国へ広まったと言われています。そのため、新潟のみならず全国の博物館には必ず1~2台あるという博物館の定番展示物です。5年前、使われなくなって壊されると聞いた踏み車をいただきました。この踏み車は、親子が担いで何処へでも運び、そして直ぐに設置して使うことのできる携帯用のもので、江戸時代開発された革新的な揚水用具です。会員で使ってみると現代人でも結構うまく出来る上に、電動ポンプ同様に大量の水を揚げる事に驚きと発見をしました。新川が200年前に人の手によって開削された際の底樋(現在の水路トンネル)を埋め込む工事絵図には、一列に5台の踏み車を10段に

配置して、高低差3m下の排水を汲み上げている様子が描かれています。西蒲原の低湿地帯を、現在の実り豊かな穀倉地帯に変えて行った原動力の一つと言っても過言ではありません。先人の苦労を味わいながら、踏み車の偉大さ、そして、「水」と「土」そして「人のくらし」を考える良いきっかけ作りとなりました。この踏み車は誰でも簡単に使えるものですが、体重のある大人より子どもたちの方がうまく出来るという特徴を持っています。また、踏み車と言うと博物館に展示されているもので、触ってはいけない、ましてそれを屋外で使う事は何処にもなかったのですが、当会はこのタブーを破って、「開港都市にいがた水と土の芸術祭2012」で行い、大変好評でした。更にこの体験を新潟市民に広げるため痛んだ踏み車を修理し、安全でかつ「昔の苦労」と「踏み車の素晴らしさ」を体感していただくために実施しました。(文：加藤)

●7月22日(日)~8月26日(日)の土、日の全8回 踏み車体験会(新潟市西区新川周辺)